

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 29 日現在

機関番号：37503

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24652138

研究課題名(和文)「帝国」としての徳川日本と東北アジア 支配領域と商品生産・流通・消費の空間構造

研究課題名(英文) Tokugawa Shogunate as a Small Empire in Northeast Asia: The Spatial Structure of the Japanese Economy and Territorial Dynamics, 1550-1850

研究代表者

藤田 加代子 (FUJITA, Kayoko)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・准教授

研究者番号：90454983

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：江戸時代(1603～1868年)の日本は、「鎖国」という語で一般に想起されるような閉鎖した経済体系ではなく、領土の南北にある「異国」(琉球王国)・「異域」(蝦夷地)を中国および日本国内市場向け商品の生産地として組み込んだ「帝国」的な政治的・経済的実体であった。本研究は、主として繊維製品(生糸、絹織物、綿織物)、海産物、貨幣材料(日本銀、アメリカ銀)などの輸出入に着目し、徳川日本の経済が中国を中心とする東アジア経済およびグローバルな物流とどう結びついていたか、またそれにより日本の物質文化が長期的にどう変容したかを分析した。

研究成果の概要(英文)：This research investigates the historical process through which Japan under Tokugawa rule (1603-1868) rose as a Small Empire by expanding commercial networks to, and territorially incorporating, the northern and southern frontiers, that is, Ezochi or Ainu Mosyr (present-day Hokkaido and the northern islands) and the Kingdom of Ryukyu. The Tokugawa regime formed a semi-autonomous economic system by reducing the outflow of gold, silver, and copper and minimising its dependency on foreign goods, especially textiles, by import substitution. This research shows that 'autonomy' was achieved only by creating a self-centred hierarchical system of diplomacy and commerce that emulated the Chinese model, with the use of coercive measures if necessary. In short, the Pax Tokugawa was brought about by incorporating the frontier and its non-Japanese population as 'internal colony' to provide necessary materials for Japan in response to changes in Japanese domestic economy and overseas markets.

研究分野：近世日本対外関係史、海域アジア史、グローバルヒストリー

キーワード：近世史 帝国論 日本 蝦夷地 江戸時代 貨幣 繊維製品 海産物

1. 研究開始当初の背景

(1) 申請当時、科学研究費補助金(基盤 B、課題番号: 21320115)「帝国・システム・海域ネットワーク: 19世紀以前のアジアにおける広域地域史の再構築」を得て、植民地化以前のアジアにおける海域ネットワークと諸帝国に関する共同研究を進めていた。その活動を通じて、江戸時代日本の社会経済および対外関係に関する一次資料と先行研究を分析するうち、(1) 沖縄・北海道の日本への経済的・政治的な統合は明治期ではなく17世紀の日本商人の進出に始まる長期的な動きであり、かつ(2) 海外市場向け生産物(海産物・砂糖)が日中商人によって大陸へ輸出される、東北アジアに広がる物流網が形成されていたこと、の重要性に行き当たった。2011年2月には同科研グループと国立シンガポール大学アジア研究所 ナーランダ・シュリヴィジャヤ・センターとで国際ワークショップ ‘Empires and Networks: Maritime Asian Experiences, 9th to 19th Centuries’ を共同開催し、上記の課題について報告と討論を行ない、琉球王国・蝦夷地(「アイヌモシリ(アイヌの地)」)を包含する「帝国」としての徳川日本の形成とその物質文化の変容過程の連関性の解明というテーマの着想を得た。

2. 研究の目的

(1) この挑戦的萌芽研究は、研究代表者が2012(平成24)年度に開始した個人研究プロジェクト ‘Tokugawa Shogunate as a Small Empire in Eastern Asia: The Spatial Structure of the Japanese Economy and Territorial Dynamics, 1550-1850’ (『帝国』としての徳川日本と東北アジア一支配領域と商品生産・流通・消費の空間構造一)の理論的考察と実証的研究の基盤部分に相当する。

この研究プロジェクト全体の目的は、江戸時代(1603~1868年)の日本が、一般に「鎖国」と呼ばれる閉鎖した経済体系ではなく、領土の南北にある「異国」(琉球王国)・「異域」(蝦夷地)を中国・日本国内市場向け商品を生産する「植民地」として組み込んだ「帝国」的な政治的・経済的実体であったことを論証することにある。また徳川日本だけに着目するのではなく、同時代の世界各地の「帝国」との比較を行なっていく。

(2) この挑戦的萌芽研究をさらに発展させ、英文学術書として海外の学術出版社から刊行することが最終的な目標である。日本の歴史学研究の水準は世界的に見て極めて高いにもかかわらず、言語の壁もあり、その豊富な蓄積はこれまで十全に海外の学界と共有されてきたとは言い難い。本挑戦的萌芽研究を出発点とし、一次資料に基づく実証的分析だけでなく、日本の近世日本史、アジア海域史、グローバル・ヒストリーなどの優れた成果をひろくサーヴェイし、英文の学術書とし

て体系的に英語圏の研究者・教育者に紹介することで、歴史研究におけるグローバルな知的交流の進展に貢献できるものとする。

3. 研究の方法

複数年にわたる研究プロジェクトの基盤形成がこの挑戦的萌芽研究の目的である。そのため、(1) 先行研究の整理、(2) 史料調査、(3) それらの分析結果に基づく英文ペーパーの執筆と国内外の研究会における報告、(4) 学会等を通じた、将来の研究のための人的ネットワークの形成、という計四点の課題を設定した。

上記の課題を達成するため、以下の方法で研究を実施した:

(1) 日本と琉球・蝦夷地・中国やアジア他地域間の貿易と外交関係に関する先行研究の網羅的な調査を行なう。加えて、貿易部分に関する日本語・中国語・オランダ語(オランダ東インド会社)一次資料中の記録をデータベース化し、助成終了後の執筆に備える。

(2) 近世グローバリゼーションの進展による世界各地の物質文化の変容に関する先行研究(経済史、社会経済史、文化史など)を整理する。特に生糸・絹織物などの繊維製品、金属(貨幣鑄造材料、宝飾・装飾品やさまざまな製品の原材料)、海産物(国内向け肥料、食料品、海外市場向け商品)の三項目を重点的に網羅する。分析にあたっては、食や衣などの毎日の暮らしと並んで、それを可能にした生産体制の変化を重視する。

(3) 近代以前の「帝国」に関する先行研究の理論的な整理を行ない、16~19世紀半ばの世界各地の政体と江戸時代の日本を比較する。「世界帝国」と呼ばれる大清帝国やオスマン帝国だけでなく、ポルトガルの「海洋帝国」や東インド会社など、異なる類型をカバーする。また南・東南アジア史研究で近年注目されている「小さな」政体、とりわけ商業/海洋貿易ネットワークの結節点となった王国群について、徳川日本との比較対照の上で特に重視する。

なお(2)(3)については、帝国史と物質文化史の理論・実証分野での最新動向を批判的に検証するため、助成最終年度にカリフォルニア大学ロサンゼルス校歴史学科に客員研究員として席を置き、地域史やグローバル・ヒストリー研究者らと継続的な討論を行なう。

4. 研究成果

(1) 先行史ですでに指摘されているように、日本の対外貿易は、日本銀の輸出と中国生糸の輸入を基調とする時期と、金銀山の枯渇によって貿易が収縮傾向にむかう17世紀中葉をはさんで、銅・海産物の輸出と砂糖・薬

種の輸入を基調とする時期に、大きく二分することができる。まず第一期について、先行研究ならびに研究代表者のこれまでの研究蓄積を踏まえて、オランダ東インド会社・唐船・対馬・薩摩による銀輸出とアジア諸地域からの生糸・絹織物輸入の関係を数量的に明らかにし、英文研究書で報告した。特に、南・西アジア産繊維製品の輸入に注目することで、17世紀以降の日本が中国を中心とする東アジア経済圏を越えるグローバルな流通と文化接触の中に包摂されたことを論じた。

(2) 第二期について、主として先行研究に基づいて、日本・中国市場向け海産物の生産と徳川日本の対外・国内統治政策の関連について分析した。同時期には、蝦夷地を中心とする各地でいわゆる俵物三品やその他海産物などの商品が開発され、商都大坂・江戸を含む日本の都市で幅広い階層に消費されたほか、長崎や那覇から中国人海商のネットワークを通じて中国南部の港に輸出された。幕府も介入しての海産物生産体制の強化の結果、日本全体の海産物生産量は急増したが、松前蝦夷地の請負高は非常に高く。例えば干鮑では全国総請負高の40%、通常の年間輸出額にほぼ相当する数量を占めた。

ここで明らかなのが、日本のフロンティア政策と商品生産のシステムが中国の都市人口の増加と購買力の上昇の影響を強く受けていたことである。また海産物などの中国市場向け生産の拡大は東南アジアでも報告されており、徳川日本の経済が世界的な商品生産のブームと切り離せないことを示している。さらに統治の面では、ロシアの南下に対応する目的で、江戸幕府は1799年以降数段階を経て蝦夷地を幕領としている。

これらを総じて、江戸の徳川政権は、中国にその原型をもつ小中華思想を下敷きとし、日本とその周辺の国・地域から構成される「帝国」的な形態をもつ国家の中に、北方のフロンティアとそこに住む民族を国内・海外用商品生産の場として取り込んだと言える。この「小帝国としての徳川日本」という図式については、今後の研究においてさらに実証・理論の両面から考察を深めていく必要がある。

(3) 18世紀中ば以降の対外貿易が日本全体にとってどのような経済的意味をもっていたかを考察するため、輸出海産物と交換に輸入された金属（貨幣鑄造材料となる金、銀、錫、鉛など）について一次・二次資料を検討した。この時期の貴金属の輸入量については、森永種夫校訂『続長崎実録大成』（長崎文献社、1974年）所収の「長崎志続編」に、1768（明和五）年～1839（天保十）年の唐船・蘭船による金銀年間輸入量があることが知られている。しかし、このテキストは他の写本に比べて漏れが多く、長期的動向を追うためにそのまま使用するのには注意を

要する（脇田修大阪大学名誉教授のご教示による）。

そこで長崎歴史文化博物館や内閣文庫などが所蔵する同種の史料を比較検討したところ、1847（弘化四）年までは貴金属輸入が続けられていたのを確認できる同年付けの写本を発見した（長崎歴史文化博物館学芸員の深瀬公一郎氏のご協力を得た）。この新出史料は、江戸時代後期の徳川政権による通貨供給策、物価対策を考える上で、たいへん重要である。今後は開港後の金流出とハイパーインフレが始まる1859年までの空白を埋める史料の発掘が目標となろう。なお第14回ヨーロッパ日本研究協会国際会議などの場で、上記史料を中心にした研究報告を行なった。

中国の外国銀輸入・輸出の動向と対照すると、日本の金銀輸入はグローバルな金銀流通ときわめて密接な関係にあったことがわかる。日本への銀輸入が減少した時期は、中国への外国銀（主としてアメリカ銀）の輸入量が激減し、あるいは中国へ流入した外国銀が英領インドへ大量に再輸出された時期と重なっている。したがって、日本の通貨政策に占める輸入貴金属の大きさを考えると、18世紀後半以降の日本はいわゆる「鎖国」的な「閉鎖的な市場体系」ではなく、海産物の生産・輸出と貨幣鑄造材料の輸入を通じてグローバルな経済とつながっていたと結論できる。

(4) 英国博物館において、学芸員のヘレン・ワン博士のご協力を得て、同館東アジア貨幣部門所蔵の貨幣コレクションを実見した。18世紀後半以降、日本へは通貨鑄造のため大量の金銀（アジア各国、ヨーロッパ、アメリカの金銀貨幣および金銀インゴット）が輸入された。しかし、研究の進んだ銀に比べ、金については実態の解明が進んでおらず、徳川日本の対外貿易をグローバルなネットワークの中に位置づけることを難しくしている。

同館では、フランス東インド会社の沈船フランス・デ・コンティ号（1746年）から引き揚げられた金インゴット3点を実見した。これらにオランダ東インド会社の沈船ヘルデルマルセン号（1752年）の金インゴット172点を併せて、日本史料にある輸入「中国金」と比較すると、同じ中国の金インゴットがヨーロッパや日本の市場に輸出されていたことがわかる。これらインゴットの形状（錠、錠）および品位（18～22カラット）はまちまちだが、重量は十両（テール）で均一である。銘から中国人によって、おそらくは貿易用に、鑄造されたとわかるが、鑄造された場所は不明である。また原料の金の生産地については諸説あるものの（アメリカ、東南アジア）、科学的分析が行われていないため、現在では特定できない。これらはグローバルな金流通をめぐる大きな問題であるため、将来的にワン博士と協力していく予定

である。

(5) 2015年度後半に研究の場をロサンゼルスに移し、講義期間中には難しい、幅広い分野の専門家との議論に集中した。まずカリフォルニア工科大学とカリフォルニア大学ロサンゼルス校の研究者が主催している中国経済史研究会に定期参加し、宋代から19世紀までの中国の社会経済史や貨幣史に関する最新の研究動向に触れる機会を得た。

また、カリフォルニア大学ロサンゼルス校でサンジャイ・スブラフマニヤム教授のセミナーに参加を許され、グローバル・ヒストリーにおける17・18世紀の位置づけについて、他の参加者との討論を通じて知見を深めた。ここで論じられたトピックは、スブラフマニヤム教授の提唱する「接続された歴史」という概念をはじめ、「17世紀の全般的危機」「帝国の比較史（オスマン、ムガル、明清）」「イベリア帝国」「東インド会社」「17世紀をいかに表象するか」「コロンブスの交換と嗜好品文化」など、本科学研究にふかく関わるものであり、助成終了後に研究を進展させるための手がかりとなった。さらにセミナーの前後に、スブラフマニヤム教授と近世インド＝ユーラシア史と物質文化について、自身の研究成果を踏まえて意見を交換した。今後は、複数のメンバーを得て共同研究を実施することを検討中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① Fujita, Kayoko. Metal exports and textile imports of Tokugawa Japan in the 17th century: The South Asian connection. In *Offshore Asia: Maritime Interactions in Eastern Asia before Steamships*, ed. Fujita Kayoko, Momoki Shiro, and Anthony Reid, 256–76. Singapore: ISEAS (Institute of Southeast Asian Studies, National University of Singapore), 2013. 査読有.

[学会発表] (計 9 件)

- ① Fujita, Kayoko. Textile cultures and the Tokugawa economy: on foreign trade, import substitution, and the changing material culture, ca. 1550–1850. Conference on Histories of Japanese Art and its global Contexts: New Directions. Institute of East Asian Art History, Heidelberg University, Heidelberg, Germany, 22–24 October 2015.
- ② Fujita, Kayoko. The monetary system of Tokugawa Japan and the market-oriented production of marine goods. 17th World Economic History Congress. 京都国際会議場, 2015年8月4日.

- ③ Fujita, Kayoko. Small-scale business by the employees of the Dutch East India Company (VOC) in the shogun's port of Nagasaki. 17th World Economic History Congress. 京都国際会議場, 2015年8月4日.

- ④ Fujita, Kayoko. Nagasaki in the Asian trading networks of the 17th century. 4th Asian Historical Economics Conference. Boğaziçi University, Istanbul, Turkey, 19 September 2014.

- ⑤ Fujita, Kayoko. The local monetary system and the changes in foreign trade: The case of Tokugawa Japan. 国際ワークショップ「19世紀前半『世界不況』下の貿易・貨幣・農業：ユーラシア東南部における比較と関連」。愛媛大学（愛媛県松江市）, 2014年9月6日.

- ⑥ Fujita, Kayoko. Changing commodity flows and the spatial structure of the Tokugawa shogunate: Rethinking the Tokugawa economy in world history. 14th European Association for Japanese Studies International Conference. University of Ljubljana, Ljubljana, Slovenia, 28 August 2014.

- ⑦ Fujita, Kayoko. Comments on the paper 'The Dutch East India Company and Asian Raw Silk': From the view point of maritime Asian history. International workshop on the Dutch East India Company and Asian raw silk. 大阪大学（大阪府豊中市）, 2013年11月23日.

- ⑧ Fujita, Kayoko. Comments on the papers on the 'End of a Silver Era' and Southeast Asia: From the perspective of Tokugawa Japan. 57th International Conference of Eastern Studies. 日本教育会館（東京都千代田区）, 2013年11月23日.

- ⑨ Fujita, Kayoko. Ayutthaya through the eyes of the Europeans: A comment on the lecture by Professor Charnvit Kasetsiri. Fukuoka Prize Academic Forum. アクロス福岡（福岡県中央区）, 2012年9月14日.

[図書] (計 1 件)

- ① Fujita, Kayoko, Momoki Shiro, and Anthony Reid, eds. *Offshore Asia: Maritime Interactions in Eastern Asia before Steamships*. Singapore: ISEAS (Institute of Southeast Asian Studies, National University of Singapore), 2013. 1–344.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤田 加代子 (FUJITA, Kayoko)
立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学
部・准教授
研究者番号：90454983

(2) 研究分担者

なし。 ()
研究者番号：

(3) 連携研究者

なし。 ()
研究者番号：

* * *

最後になりますが、助成期間中に国内外のさまざまな研究機関および研究者の皆様からご協力をいただきました。すべての方々のお名前を記すことはできませんが、ここにあらためて感謝いたします。また、申請書を読み、研究の機会を与えてくださった審査員の皆様にも、御礼を申し上げます。